
ものぐさな魔術師

クロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ものぐさな魔術師

【Zコード】

Z5904Z

【作者名】

クロロ

【あらすじ】

『龍玉』。それは人族やエルフ族、獣人族など様々な種族が住む、龍神が創つたとされる世界。

その世界で魔術師として生きていた魔族の男は、ある日『混ぜモノ』と呼ばれる忌み嫌われた存在を引き取る。楽しく生きたい魔術師のアストリスクと、平穏に生きたい混ぜモノのオクトの物語です。

ものぐさな賢者、幼少編が終了しましたので、御礼を込めて、ア

スタリスク視点で書かせていただきます。幼少編でアスタリスクが何を考え、どのように動いていたのかといった内容となります。

あー……面倒臭い。

アストラリスクへ。

手紙にはでかでかと俺の名前が書かれている。裏面には母親の名前。中身はまだ確認していない。でも何かは理解できて、俺はため息をついた。

「今度は何て言つて断ろう……。はあ」

内容は再婚の為の見合い話だ。

結婚なんて、もうする気はないと言つたのに、本当に話を聞かない親である。というか、俺だってもう成人しているんだからそんなに口出ししないで欲しい。

独りになつてこれで15年くらいだろうか。息子は学校の宿舎に入つてゐるし、1人で暮らすのも大分と長くなつていった。心配してだとは分かるが、今の生活の方が気楽だというのが正直な所だ。それに置いてかれるのはもう懲り懲りだった。俺は魔族で、妻は人族。妻が先に死んでしまうのは分かりきつていた事。それでも愛した相手が先に死んでしまうのは、結構キツイ。もう一度結婚するなんて正氣の沙汰とは思えなかつた。

「保留だ。保留」

ぽいつと机の上に手紙を放り出した俺は、仕事場である王宮の研究室へ行く事にした。

1話　変な子供

「アスタリスク魔術師！第一王子が、転移魔法陣の完成を急げとみえていますが……」

「あー、適当に言つておいてよ。まだ失敗するリスクの方が高いとか」

王子、マジ鬱陶しい。

軍事の事しか脳みそに詰まつていらない馬鹿王子は、今日も懲りずに転移魔法の軍用化を考えているようだ。わざわざどぞつかの戦地に行つて欲しい。そして一度と帰つてくるな。

「アスタリスク魔術師が言つて下さいよ」

「俺は忙しいの。鉱物への魔法添加、もつと簡単にしろって言われたからその魔方陣を作り中なんだけど。何？リストがやつてみる？」「む、無理ですっ！！……分かりました。丁重にお帰りいただきますよう。でも、たまには会つて下さいよ。本当に五月蠅いんですね」あまり気が強くないリストは、しょんぼり肩を落とすと待合室の方に行つた。

俺の仕事は、魔術の研究だ。今は魔法使いや魔術師しか使えない魔法を一般人でも使えるようにする為に、国の金で研究させてもらつていい。しかし最近は、軍の力が増し、もっぱらそつちの研究が増えている。増えていた。

「ああ。家でも、仕事場でも気が休まらない。

「だりい……」

椅子にもたれかかるとギシリと音が鳴つた。俺こそ悲鳴を上げそうだ。

王子が早く作れと言つ転移魔法は、大氣にある魔素を使い転移するもので、魔力のない一般人でも使える魔方陣の事である。実のと

こうを言えば、転移する場所さえ固定してしまえば実用可能なレベルにはなっていた。

ただこれを軍用化するとなれば話は別だ。転移先がどうなつているのか見えないので、転移した瞬間に殺されるリスクが大きい。それに魔方陣を少しでも書きかえられると、転移に失敗し、最悪死ぬ可能性がある。そしてこの魔法陣を使って先頭を切つて行かされるのは、貴族でも王族でもなく戦争の為に集められた一般人だ。

「こんな為に魔術師になったわけじゃないのにな」

あーでも、何のために魔術師になつたんだっけ。

最近は良く分からなくなつてきていた。いつのころからか、惰性で仕事をするようになつていた気がする。若くはないのだし、それもまた人生だとは思う。それでも、このやる気のなさは問題か。

「アスター。お前、せつと結婚でもしろ」

「はあ？」

ペンをぐるぐるとまわしていると一番聞きたくない話題が聞こえた。何で家でも職場でもそんな話ばかり聞かなければいけないのか。声の主を睨みつけると、緑髪のエルフが肩をすくめた。

「それが無理なら、息子と一緒に生活しろ」

「嫌だ」

「お前は魔族なんだろ。独りでいるから、イライラするんだ」

「余計な御世話。エンドこそ結婚すれば？」

「エルフの結婚適齢期はまだ先だ」

「あつそ」

結婚、結婚と本当に五月蠅い。

ただエンドが言うのも分かる。魔族というのは、誰かと過ごさなければ安定しない弱い種族だ。もしくは誰かに盲目的に仕える事で

安定する。そんな魔族の為に今も魔王という存在は居るらしいが、俺はどうも誰かに仕えるというのは性に合わない。そしてこの王宮でも、俺が仕えたいと思う相手はいなかつた。

精神的に強くない種族なのに、どうして長生きなのか。本氣でうんざりする。

「あー、俺。ちょっと異界屋に行つてくるわ。王子が来ても、俺が居ないって言つた方が、追い返しやすいだろ」

「アスター？」

エンドの返事を聞かず俺は、脳内に魔方陣を思い浮かべ、それを発動させる。

ブンと視界が揺れたと思うと、次の瞬間には異界屋の前に立つていた。突然現れた俺に、周りが少し驚いていたが、仕方がない。

異界屋のドアをぐぐると、猫族の店主が出迎えてくれた。

「先生また来たのかい」

「客に対しても、それはないだろ」

少し呆れ気味な店主に、俺は口をへの字にした。確かに最近、ここに逃げ込む回数が増えた気がするが、ちゃんと俺は店に貢献している。買う時は買うし、いろいろ助言だつてするのだ。

「ああ。悪い意味じゃないんだ。最近来る回数が増えたと思つてな」「ちょっと、仕事がうまくいかなくてな。息抜きがしたいんだ。それで、何か面白いもの入つてないか？」

俺は店内を見る事なく、まっすぐレジカウンターの方へ向かつた。新しく見つかつたばかりのものや、使い方が発見されたものは大抵店主が奥に隠し持つている。

「座つて待つててくれ。今持つてくれるよ」

奥に取りにいった店主は、じつちやりと色々持つてきた。後先考えずに、また大量に入荷したようだ。

「こんなに入荷したのかよ」

「かなり安く仕入れれたんだ。これなんて、綺麗だろ？」「

その手には宝石らしきものがちりばめられた四角いものが握られていた。確かに綺麗だが、装飾品ではなさそうな形だ。

「安くって、パチモンじゃないだろ？」

「うつ。ほり、そこは先生が見極めてくれれば……。お願ひしますよ。なつ？」

やはり何も考えずに買つたようだ。

この店主はヒトとしては結構いい奴なのだが、どうにでも詰めが甘いというか、騙されやすい。異界屋は数が少ない上に、信用ならない裏で生きるような者が店を開いている事が多いので、是非とも生き残つてもらいたいのだが……。

俺は一度目を閉じると、瞼の辺りに魔力を集める魔方陣を思い描いた。

「我が声に従い、異なる世界を見せよ」

田を開くと、店主が持ってきたものが紫色に薄ら光るのが見える。この魔力の色は異界からきた証拠だ。一つ一つ違つのが混じつ正在中るので、それらを弾く。

「こつちは全部異界からのものだよ」

「おあつ！ 今回は当たりが多いな」

「喜ぶのは早いから。さつさと使い方を調べろよ」

当たりが多いじゃなく、ちゃんと当たりのものを仕入れると言いたいが、店主は魔法使いでも魔術師でもないので仕方がない。だからなんでこんな仕事をしてるんだと言いたいところだが、なら止めると言われても困る。

「分かつてるよ、先生」

本当に分かつてるんだろうか。店主はへらへら笑いながら、今回の戦利品を手に入れた経緯を話しだした。それを聞きながら俺も手にとつて眺める。

相変わらず、何かよく分からない物ばかりだ。それでも異界はこ

の世界とは違う進化をしており、時にはこちらを凌駕する。現にこの世界でも見慣れたものになった『紙』も、元は異界から来たものを研究した魔術師が発明したものだ。

「…………！」

客なんて誰もいないので、とても静かだった店内に変な音が鳴つた。あまり日常的な音ではないソレに、俺は顔を上げた。何の音だろ？

「なにやってんだっ？！」

店主が走つて行つたと思うと、どなり声が聞こえた。

「はなせよっ！！」

「店のものを壊しやがつて。ここは子供遊ぶ場所じやないぞ」「どうやら子供が入り込んだらしい。こんな場所、俺みたいな職種以外楽しくもなんともないだろうに。」

店主はいい奴だが、獣人というのは頭に血が上りやすいという短所がある。どんな子供かは知らないが、わざとではないだろうし、穩便に済ませてやつた方がいいだろ？

店主の方へ行くと、子供が一人つまみ上げられていた。服装からして、旅芸人の子供と言つたところか。じたばたと暴れている。

「こわしてねーよ。さわつただけだつて」

言葉づかいも乱暴だし、少なくとも貴族ではない。店主が殴つたところで問題にはならないだろうが……さて、どのあたりで止めようか。壊された店主も、ただ止めるだけでは腹の虫が収まらないだろ？

「クロ。貸して」

良く見れば、店主の足元にもう一人子供がいるようだ。見た瞬間、俺は息をのんだ。

……なんだ、あの気持ち悪い塊。

塊といふか、どうやら子供周りに「じゅうじゅう」と精霊が居るようだ。しかも色々な種類の精霊が居過ぎて、子供が見えない。俺は日に魔力を溜めていた事を思い出し、慌てて視界を元に戻した。

そこには、金髪の子供が居た。右目の人間に痣がある。珍しい。

俺はもう一度驚いた。……混ぜモノだ。

「……何したんだ」

「壊してない」

気がつけば、変な音は消えていた。どうやら、この混ぜモノが音を止めたらしく。

「防犯ブザーが正常に動いただけ。クロを放して」

防犯ブザー? 何だそれ。

どうやらこの混ぜモノは俺が知らない事を知っているらしい。何処まで知っているのだろう。少し興味がわいた。

「いやー、嬢ちゃん凄いな」

俺はできるだけフレンドリーに笑ったのだが、混ぜモノは警戒するように俺を睨む。まるで毛を逆立てている子猫のようだ。

「ところで嬢ちゃん。そんな事何処で知ったんだ?」「えっ……。ママが教えてくれた

少しひるんだ表情をしたと思えば、混ぜモノはうつ向いた。何か聞かれたくない事だつたのだろうか。下に向かれると、顔が見えず何を考えているのか分からんだけどなあ。

「混ぜモノの母親が? 一体、どんな

「オクトがかなしんでんだからそれいじょつきくなよ。オクトのかあさんはしんだんだ

店主が聞こうとすれば、先ほどまで掴まれていた男の子が混ぜモノ オクトの前で手を広げた。同じような服を着ているし、兄弟だろうか。

そう思つた所で、すぐに俺はそれを取り消した。黒髪の男の子は

人族だ。混ぜモノではない。

「それは悪かつた。混ぜモノの子もごめんな。ところで、他には何か聞いていないのかい？」

あつさりと店主は納得したようだ。おいおい。信じるの、早すぎだろ。

店主はどうにも死別したとか、そういう涙ものの話に弱い。男の子の後ろで抜け目なくこちらを見ているオクト相手では、あつさり口車に乗せられそうだ。

「もしもこの後鳴らなかつたりしたら、嬢ちゃんたちが壊したって疑われるよ? これは永久的になるもののかい?」

俺はもう少しオクトと話したくて、声をかけた。するとオクトはギロリと音が聞こえそうなほど睨みつけてきた。小さいので怖くはないが……俺はそんな睨まれるほどいの事したかとちょっと聞いてみたい。

「……電池が切れたらもう鳴らないから」

しばらくすると、ボソリとオクトは答えた。これまた、俺の知らない単語が混じっている。

「電池つてなんだい?」

「……動かす力になる元。頭の部分のねじを外すと中に入っているから」

なんて嫌そうに話す子供だらう。子供らしさがかけらもない。オクトを守るうとしている男の子の方が子供らしく見えて俺は地味にウケた。

「クロ、帰ろ?」

「嬢ちゃん、待つた。折角だからもう少しゅつくりしていかないかな? なあ店主」

「ああ。是非そうしてくれ。お菓子もあるぞ」

早々に帰ろうとするオクトを俺は慌てて呼びとめた。久々に面白

いものを発見したのに、こんなに簡単に返したらもつたらない。

オクトは店主の言葉にいかにも馬鹿にしたような視線を向けた。

見た目とのギャップに俺はゾクゾクする。なんだこの面白い生き物。

「おかし?」

男の子は年相応の反応で、田を輝かせる。「ん。やっぱりこれが普通だよな。

「クロ、黙目」

「でも」

「黙目」

「おいしい話には裏がある」

「おかしにづらがあるのか?」

「あー……お菓子にあるんじゃなくて」

「ほり持つてきたぞ」

これではどっちが年上か分からぬ。まるでコントだ。

それにしても、頑固な子供だ。あげるといつのだから食べればいいのに。俺は店主が持つてきたクッキー一枚つまみ上げた。

「あーん」

男の子に差し出すとクッキーをパクリと食べた。おお。これはこれで、可愛いな。

「……いくらですか?」

「払えるの?」

払えても、別にもうつ氣はないんだけどな。

観念したかのように肩を落とすオクトを見て、俺は久々に楽しいと思った。

2話 突然な幸せ

面白い生き物を見つけた。

名前は、オクト。種族は、混ぜモノだ。

「……うわっ。キモッ」

「ああ？ 誰がキモイだ」

「お前だよ。お前。何ニヤついているわけ？」

ヒンドが、エルフ特有の美貌な顔を歪める。そんな嫌がられるほどニヤついていたんだろうか。

「いや。昨日ちょっと、面白い生きモノ見つけてね」

昨日までの憂鬱が嘘のよう、今日の俺は幸せだった。もちろん再婚なんてする気はさらさらないけれど、今の俺なら笑顔で見合い話を断れる気がする。

異界屋にまんまとオクトを引きとめた俺は、色々と面白い情報を聞いた。どうやらオクトは、ロード003の世界の事をかなり詳しく知っているようだ。そこでは言葉を濁していたがあの様子だと、店主がオクトに見せた道具のほとんどを理解しているに違いない。母親に聞いたとつたが、何処まで本当なのか。

どちらにしても彼女は賢者だ。本来知るはずのない知識を知り過ぎてしている。

「面白い生物？なんだそれ？」

「えっと、金髪の子猫みたいな？」

オクトは最後の最後まで警戒を解かなかつた。その姿は、まさに懐かない子猫だ。しかも5歳にして交渉しようとするとは。なんだソレ。面白い。

今度は何をするのかと、俺はかなりドキドキしながら意地悪な質

問をぶつけたりした。

「……お前ら魔族つて、よく分からない」「エルフ族に知つてもらいたいとは思わないけどさ。それ、どういふ意味？」

エンドはエルフ族にしては、気どつた性格はしていない。それでもたまに無神経なように思つるのは俺だけだろうか。

「子猫一匹で、世界が終わつたみたいなお通夜な表情が、気持ち悪いぐらいの笑顔になるからだよ。誰かと一緒に居たくないなら、その子猫でも引きとつたらどうだ」

「ああ、その手があつたか

目から鱗だ。

そうだ。別に結婚なんてする必要ない。引き取ればいいのだ。オクトが俺の家に来る。それは凄く楽しげなことに思えた。

彼女はいきなり引き取られたら、一体どんな行動をとるだろ？
そして5歳なのにすでに色々と考えて生きているあの子は、今後どんなふうに成長していくのか。考えるとゾクゾクした。

ああ、まるで恋をしているみたいだ。

「ありがとう、エンド。君は恩人だ」

「……待て。止める」

「何でだい、エンド君」

「君とかいうな。寒氣がする。とにかく、鏡をみる。今のお前の目は、どう見ても犯罪を起こしそうな目だ」

失礼な奴だな。

折角いい気分だったのに、それが台無しだ。

「ちょっと、子猫を引き取るだけだつて」

「もう飼い主が居るんじゃないか？だつたら、止める。俺は同僚を犯
罪者にしたくない」

「どういう意味だよ。それと、子猫には親が居ないそつだ。丁度いいだろ」

オクトは警戒してほとんど情報をくれなかつたが、変わりにクロが答えてくれた。それにしても、一緒に育つたというわりに、全然似ていな。他人なのだから当たり前だが、6歳のクロが子供らしいのに対し5歳のオクトは、子供らしさのかけらもない子供だった。可愛いのは見た目だけである。青い瞳は氷のようだ。

「今のお前は、悪だくみしているような顔をしているんだよ。ほらエンドは手鏡を俺につき出した。

「…………うわー。お前、もしかしてナルシスト？」

「ヒトの好意を……もういい。勝手にしろ」

「いや、男つて普通持つてない。分かつた。今のは俺の失言。ただヒトを犯罪者扱いするからさ」

鏡を覗き込むが、そこにあるのはいつもの俺だ。昨日より気分がいいため、顔がゆるんでいるがそれだけだ。俺は少しだけ髪を整えると、エンドに返す。

「分かつた。俺も失礼だつた。もう何も言わないが、せめて何か事を起こすなら、貴族として動け。その方が罪が軽くなる」

「…………結局犯罪者扱いしているだろ」

心配してくれているのだろうが、絶対エルフってずれている。

翌日異界屋の近くに来ている旅芸人を探すと、簡単にグリム一座は見つかった。

「本日、最終公演つて、マジ?」

「そうだよ、お兄さん。午前は終わったから、後はもうすぐ始まる
午後からだけだよ」

大々的に宣伝をしているようで、団員からビラを貰つた俺は驚いた。ギリギリじゃないか。

旅芸人というものは、公演が終わつたらさつと居なくなってしまう。もしも明日探していたら、もうオクトと会つ事はなかつただろう。

ある意味凄く運がいい。

「この国での講演はこれが本当に最後。だからチケット買つてよ。
見て損はないよ！」

「いいよ。どこで買つたらいい？」

「案内するよー。」

頭に花をいっぱい飾つたお譲さんは二〇一〇と俺を案内する。精霊っぽくて可愛いけど、やっぱりオクトほど面白みはない。

「そういえば、グリム一座には混ぜモノがいるって聞いたけど本当
？」

「うん。居るよ。まだ小さくて役立たずだけどね」

「ふーん。今回の公演にはでるのかい？」

「でないでない。最終公演は、いつもこの一座の看板だけでやるからね。混ぜモノの見世物は珍しいけれど、退屈だし。まあ、歌はそこそこ聞けるものだけどね」

それはもつたない使い方をするものだ。あんな面白い生きモノを見世物としてだけ使うなんて。あの子供は賢いし、教えたなら色々覚えるだろう。そうでなくとも、賢者なのだ。……まあ役立たずと思ってくれている方が好都合ではあるけれど。

「歌が上手いんだ」

「精霊の血が入ってるからね。お兄さん、チケット売り場はここだ

よ

「ありがとう」

俺はにっこり愛想笑いして手を振った。お譲さんはポツと顔を赤らめると、ブンブン手を振って走つていぐ。また客引きをするのだるび。

「俺の笑顔が犯罪者つて、やっぱリオカシイよな」

そういうえば、オクトも俺の笑顔に警戒していた事を思い出す。これも普通と違うよなど喉の奥で笑つた。

チケットを買つて見た一座の芸は、中々に楽しかつた。看板というだけあって、どれもレベルが高い。特に剣の舞を踊つた女など、並みの動きではなかつた。

「これならこの国の祭りをまわるだけでもやつていけるんじゃないか？」

確かに役者も多いので、常に稼げるようになると動く必要はある。しかし国を跨いでまで動きまわらなければ仕事がないようにはとても思えない。

国籍もバラバラなようだし、もしかしたら一か所に留まれないわけありかもしない。剣の舞を踊つた女はたぶん軍人だし、その後にでてきた男は、少数民族の刺青をしていた。混ぜモノだつて、そんな簡単に生まれるものではない。

まあそんな事はどうでもいいか。

俺は見終わると、関係者がいるだろうテントへ向かつた。

「すみません、旦那。こちらは関係者以外立ち入り禁止でして」

「ああ。悪い。団長を呼んでもらえないと少し込み入つた話がしたいんだ」

「へえ。団長ですか？」

初老の男は俺を抜け目なく見た。そしてマントの肩止めの辺り……
「宝石がついているところで、目を見開く。確かにエンドの言づ通り、装いだけでも貴族の恰好にして正解のよつだ。

「俺は王宮で働く魔術師で、じついうものだ」

普段使う事のない名刺を俺は呪文なしで召喚し、男に渡した。
「す、すぐ呼んできます！」

男は何故かガタガタと震えると、名刺を持って走っていく。……
そんなに犯罪者っぽいか？いや、名刺を持った犯罪者なんていない
だろ。どれだけ自己顯示欲が強いんだよ。

しばらくすると、大柄の男がやってきた。巨人族だろうか。俺より、頭一つ以上高い。

「遅くなりました。私が団長のリーです」

「俺は王宮で働く、アスタリスク・アロッロといつ。魔術師をやつ
ている」

団長が差し出した手に俺は握手をした。団長の手は一回り大きく、まるで大人と子供のようだ。俺も結構デカイ方なんだけどな。

「今は片づけの最中でバタついておりますので、私の部屋へご案内
します」

団長が案内してくれたテントは応接室も兼ねているのか、ソファーが置いてある。運ぶには大きいが、どうやらサイズを自由自在にできる魔法がかかっているようだ。

「お座り下さい。今、お茶を用意します」

「いや。茶はいいよ。もしも用意するなら、俺の話を聞いてからにしてもうえないかな？」

そう言つと団長も田の前の椅子に腰を下ろした。少し窮屈そうだ。

「お話とは何でしょうか？」

「単刀直入に言えば、ここにいる混ぜモノの子を引き取りたい」「……オクトですか？」

想像していなかつた言葉なのだろう。団長は目を丸くした。

「そう。あの子には、魔術師としての才能がある。是非俺の元で勉強させたいのだが、駄目だろ？」「

「才能ですか？」

本当は面白いからだが、さすがにそれを言つたらマズイだろう。色々考えた上で、魔力が強い事を理由にした。精靈に好かれる者は大きな魔力を持つ。実際あれほど精靈に好かれているのだから、嘘ではない。頭も悪くないし、オクトは魔術師に向いている。

「ああ。先日オクトと話す事があつて、その時親がいない事を聞いた。親が居るならば仕方がないと思ったが、いないならばあの才能を眠らせるのはどうにも惜しいと思なんだ」

「……申し出は大変ありがたいのですが、オクトはその……混ぜモノですが、大丈夫でしょうか？」

団長はいかつい眉をハの字にした。何か問題があつたらと考えているよりは、オクトの事を考へてゐるようだ。なるほど。役立たずと言われていたが、それなりに大切にされているらしい。

「混ぜモノの暴走の事を言つてゐるならば、それこそ俺の方が専門家だ。混ぜモノの暴走は感情の高ぶりにより魔力が暴走し、多量の魔力に酔つた精靈が暴走する2段階の災害だと俺は推定している。魔術師として魔力コントロールができる、大丈夫だ」

もちろんこれは俺の推定であつて、本当は違う可能性もある。なんといっても、まだ研究段階の分野なのだ。それでも混ぜモノの暴走は魔力の暴走である事は間違いなので、魔術師として魔力コントロールができるよつになれば、そのような事にはならないだろ？。

団長はしばし黙りこんでいたが、すつと姿勢をただすと、俺に頭を下げる。

「オクトは母親が突然死んだせいもあり、あまり感情を表にだす事が苦手ですが、とても優しい頑張りやです。どうかよろしくお願ひします」

「いえ。こちらこそ、ありがとうございます」

団長は立ち上ると一度テントの外へ出て行った。

さてオクトは俺が引き取ると知つたら、どんな表情をするだろう。毛虫でも見るような目をするか、それとも驚いて目を丸くするか。オクトはクロと仲が良かつたし、引き離すとなれば嫌われ、睨まれる可能性もある。どちらにしても、笑顔はなさそうだ。

「ん……嫌われるのも面白そうだけど、できたら笑顔も見てみたいなあ」

団長は感情を表に出すのが苦手と言つていたが、意外に表情豊かだ。

「もうすぐオクトが来るので、それまでこれを飲んでいて下さい」出されたお茶は「一ヒー」だった。あまりこの国では飲まないので珍しい。砂糖とミルクを入れ口にするがやはり苦い。この団長も異国出身なのだろう。

「オクトは何処出身なんですか？」

「あの子の母親は黄の大地から來たと聞いてます。風の精靈と獣人のハーフでした。あの子はここで生まれたんですよ」

なるほど。だから父親を知らないのか。子を宿してしまったから母親が逃げ出したが、父親が追い出したのかは分からぬ。もしかしたら不運にも亡くなっている可能性だつてある。

どちらにしろ、感謝だ。そのおかげで、俺はオクトを引き取れるのだ。大切に、大切に育てよう。

「失礼します」

「失礼します」

しばらく団長と雑談していると、オクトの声が聞こえた。ドキドキと俺は団長に紹介される瞬間を待つ。

「オクト。」こちらは、王宮の魔術師である、アスター様だ。お前を引き取りたいと申し出て下さっている

「やあ、小さな賢者様。またあつたね」

少しでも警戒を解いてもらおうと、俺は笑顔で話しかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5904z/>

ものぐさな魔術師

2011年12月20日14時50分発行